

2023年4月2日 主日礼拝

説教題「後で、分かるようになる」

ヨハネ福音書 13 章 1～11 節

主任牧師 加藤 誠

「イエスは答えて、『わたしのしていることは、今あなたには分かるまいが、後で、分かるようになる』と言われた。」(ヨハネ13章7節)

「さて、過越祭の前のことである。イエスは、この世から父のもとへ移るご自分の時が来たことを悟り、世にいる弟子たちを愛して、この上なく愛しぬかれた」(ヨハネ 13 : 1) という一文で始まるヨハネ 13 章の場面をととても大切に感じておられる方は多いことでしょう。ヨハネ福音書はこの 13 章から 17 章まで、実に五章もかけて主イエスが最後の食卓を囲みながら愛する弟子たちに語りかけられ、祈られた言葉を私たちに伝えてくれています。

弟子たち一人ひとりの前にひざまずき、その足を丁寧に両手で包むようにして洗い、手拭いでぬぐわれるイエス・キリスト。弟子たちはたぶん誰も一言も発することが出来ずに、部屋の中はしんと静まり返り、主イエスが手拭いを浸すたらいの水の音だけが響いていたのではないのでしょうか。弟子たちはいったいどんな気持ちで、足を差し出したのでしょうか。わたしは神学生の時に一度だけ「洗足」というものを体験したことがあるのですが、人に自分の足を洗ってもらおうということは実に恥ずかしいものです。一日中歩き回って土と埃まみれの足を差し出すのです。足は臭いが強い場所でもあります。しかも相手は主イエスです。ペトロが思わず「わたしの足など、決して洗わないでください」と、その足をひっこめようとしたのもうなづけます。主イエスは私たちのことをすべてご存知の方です。一番弟子として引き立ててもらいながらも、早とちりで、やりたがり、たくさんの愚かな失敗をして迷惑をかけてきた自分。たくさん叱られ、たくさん教えてもらってきたのに、未だにイエスさまの言葉の真意を理解できず、トンチンカンで的外れを繰り返している自分。主イエスが黙って自分の足を手に取り丁寧に洗ってくださる、その優しさを感じれば感じるほど、ペトロの心の中には主イエスの前にほんとうに至らぬ弟子である自分を申し訳なく思う思いがあふれて、足をひっこめたくなくなったのではないかと想像するのです。

けれども、なぜ主イエスがこの夜自分たちの足を洗おうとされたのか。その本当の理由を弟子たちは理解できませんでした。「わたしのしていることは、今あなたには分かるまいが、後で、分かるようになる」(7節)。この言葉は主イエスの優しさがにじみ出ている言葉だと思います。大切な主イエスの心をまったく理解できない不出来な弟子たちをとがめることなく、そのまま受け入れている言葉です。「大丈夫、後で分かるようになる」。私たちは、いつも「後で」分かるようになるのです。最初から分かっていたためしがありません。聖書の言葉の意味が、イエス・キリストの御業の意味が分からない。神さまの計画、思いが分からない。いったい自分は何のために今このことをしなければならぬのか分からない。私たちは毎日分

からないことだらけ。その私たちはいつも、いろいろな試行錯誤、失敗、挫折を通して、後になって「ああそうだったのか!」「神さま、そういう意味だったのですか!」と分かる者とされるのです。そして、どれだけ自分が小さな存在であるかが分かった時、その自分に注がれている神さまの慈しみの大きさを思い知らされていく。そういう意味で私たちはいつも「後で、分かるようになる者」です。「今は分からなくても大丈夫。あとで分かるようになるから」。私たちの未熟さをそのまま受け止めてくださっている主イエスの優しさが、この言葉にはにじみ出ています。

同時に、この言葉は約束の言葉です。「後で」とは何の後でしょうか。十字架という主イエスと弟子たちにとって最大の苦難の「後」です。弟子たちが主イエスと過越しの食事をし、主イエスに足を洗ってもらっている間にも、最期の時が刻一刻と迫っていました。知らないのは弟子たちだけで、部屋の外では主イエスに対する陰謀が実行に移されていました。「後で」とは、その十字架において弟子たちの信仰が地面にたたきつけられ粉々に砕かれた「後で」という意味です。神さまの愛も主イエスの恵みも、何もかもが見えなくなって、すべてが暗闇に飲み込まれた「後で」という意味です。しかし、どんな大きな苦難と暗闇が待ち受けていようと大丈夫。十字架の苦難と暗闇が「終わり」ではない。それはあなたたちの信仰の「新たな始まり」となる。その十字架の苦難と暗闇をわたしも共に歩み、あなたたちを復活の命に導くから大丈夫。復活において注がれる聖霊によってあなたたちは新しく造り変えられ、立ち上がらされていく。「だから大丈夫!後で分かるようになる時を、わたしが備えているから!」と、十字架を通して新たに創りかえられる弟子たちの信仰の始まりを、主イエスが確かに約束してくださっている言葉なのです。

実際、十字架の出来事に打ちのめされ、暗い部屋の中に引きこもり、立ち上がれなくなっていた弟子たちに、主イエスはご自分から近づいていかれて、「平安あれ」と声をかけ、「聖霊を受けよ!」と言って、彼らを立ち上がらせてくださったのでした。「後で、分かるようになる」。なぜ主イエスが弟子たち一人ひとりの足を洗われたのか。それは彼らの弱さと、未熟さと、不出来を、そのまま受け入れ、祈り続ける十字架の主の愛そのものであったのですが、それが分かるようになる「復活の時」を、主イエスは確かに用意してくださっていたのです。

クリスチャンとはどういう人を言うのでしょうか。聖書を良く学んでいる人を言うのでしょうか。それとも、主イエスの言われることをすべて実行できる人を言うのでしょうか。わたしは、自分の足元にひざまづいておられる主イエスを知っている人がクリスチャンであると思っています。「わたしの足など、決して洗わないでください!」「わたしの心はあなたに見せられないほど、たくさんのケガレを抱えているのです!」と言いたいところを、「もしわたしがあなたの足を洗わないなら、あなたとわたしは何の関係もないことになる!」という主イエスの言葉を受け入れて、「では、お願いします」と自分の足主イエスの手に委ねていく人。そうやって十字架の主がわたしの汚れた足を洗ってくださるといふ、その一点で、主イエスとつながられる人。その人をクリスチャンというのです。